

2022年度
特別公開

熊本・宮崎の古墳文化

—石人と貝輪—

直弧文鹿角製品
〔熊本県国越古墳〕**



平成知新館
(3F-2)



石人〔熊本県木柑子高塚古墳〕**



画文帯神獸鏡
〔熊本県国越古墳〕**



ゴホウラ貝輪
〔宮崎県大坪1号
地下式横穴墓〕*

はじめに

—九州の古墳文化と石人・貝輪—

弥生・古墳時代は日本列島に農耕文化が定着し、成熟していった時代です。およそ紀元前5～4世紀頃、朝鮮半島から九州地方西北部に稲作が伝えられ、ほどなくして弥生土器が成立しました。稲作と弥生土器を用いる文化は北海道・沖縄地方を除く日本列島に拡がり、各地で独自の発展をとげました。

弥生時代が終わる3世紀中頃に、墳丘をもつ墓に供えるための大型の弥生土器（特殊器台形土器）が変化して、巨大な墳丘をもつ古墳の出現とともに円筒埴輪が誕生しました。埴輪には、このほか次第に家形や威儀具・武器武具・船形などの器財埴輪などが加わり、円筒埴輪は墳丘を囲むように区画する役割を担うようになります。5世紀末頃には人物・動物形の埴輪も出現して、多様な形象埴輪が生み出されました。

前方後円墳という独特な墳丘形態の古墳と埴輪に象徴される古墳文化は、4世紀末頃までに北は東北地方の宮城県から南は九州地方の鹿児島県まで拡がりました。ところが5～6世紀になると、古墳の石室や副葬品などに各地で独自のスタイル（地域色）が現れます。なかでも、

九州地方の中南部（熊本県・宮崎県）では、本州・四国地方にはみられない独特の古墳文化が発達しました。熊本県・福岡県を中心に分布する石の埴輪とも言うべき石人^{せきじん}をはじめとする石造彫刻、福岡県や宮崎県に多くみられる沖縄地方（琉球諸島）から運ばれた南海産の貝殻製腕輪（貝輪）などはその典型です。

今回の展示では、九州の中でもとりわけ特徴的な熊本県・宮崎県地方の古墳文化を紹介します。



貝輪〔宮崎県旭台9号地下式横穴墓〕*

1 九州中部の石の“埴輪”

いわゆる石人石馬は、5～6世紀に九州地方中央部に広がる阿蘇山と呼ばれる軟質の石材（阿蘇溶結凝灰岩）で製作された人物・動物などを象った石造物です。人物像には武人形をはじめ、文人・力士形や裸の人物・母子形など、動物像には石馬と呼ばれる馬形や猪・鶏形などがあり、ほかにも家・盾・蓋などの器財形があります。

形象埴輪との共通性が高いことから、石の“埴輪”または古墳の埴輪を飾る石製表飾とも呼ばれています。阿蘇山の溶結凝灰岩地帯周縁部に拡がり、とくに有明海沿岸部の熊本県と福岡県南部を中心に、大分県や佐賀県・宮崎県にも分布しています（図1）。

埴輪と併用されることも多いのですが、一部を除いて1～2個から数個の使用に留まることや、実物大やミニチュア品のほか、モデルとされた実物や人物より一回り大きく造られる例があることも大きな特徴です。このような石人石馬は明治時代から注目され、埴輪や大陸の石造物と比較・検討した研究が進められており、現在でも性格や系譜に関する論争が続いています。

● 石人・石馬をもつ古墳
 ■ 阿蘇溶結凝灰岩分布



図1：石人石馬分布図（小田1974・柳沢2014から作成）

コラム 1

岩戸山古墳の石人

福岡県岩戸山古墳は6世紀前半の北部九州地方では最大規模の前方後円墳（全長132m）で、もっとも豊富な種類の石人や石馬などをもつことで有名です。江戸時代から知られ、詳細な絵図も残されています（図2）。この石人は板状で、正面は武装人物、背面は鎌が見えるように矢を納めて運ぶ鞆を表現しています（図3）。

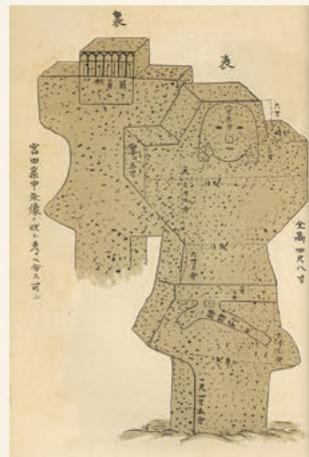


図2：石人図（矢野1861）



図3：石人〔福岡県岩戸山古墳〕***

コラム 2

本州の石馬

本州では唯一、鳥取県石馬谷古墳（米子市福岡古墳群）で馬形（石馬）や大刀形などが出土しています（図4）。しかし、これらは地元産の角閃石安山岩で造られており、九州と山陰地方の文化交流を示す事例と考えられています。

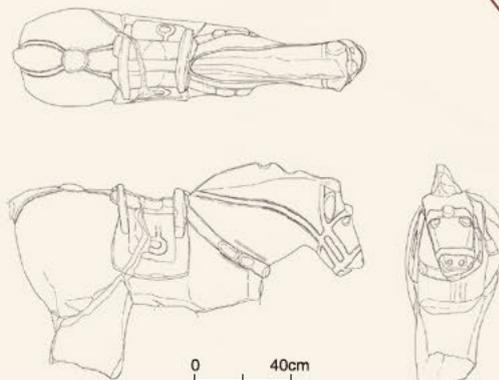


図4：石馬実測図〔鳥取県石馬谷古墳〕（中原他1990）

2 九州南部と貝の道

沖縄地方（琉球諸島）で採れるゴホウラ・イモガイをはじめとするいわゆる南海産の貝殻は、重厚で光沢があり、日本列島の先人たちの目には大変魅力的に映ったようです。

弥生時代前期から九州地方北部では腕輪の素材としてゴホウラやイモガイ・オオツタノハなどが盛んに利用されました。なかでも、奄美諸島以南の水深10m以上のサンゴ礁に生息するスイショウガイ科の大形巻貝であるゴホウラは、殻口部が袖状に大きく張り出す貝殻の形に特徴があります。このような、琉球諸島から九州への貝殻の流通の背景には、両地域の人々の交流があったとみられ、沖縄本島やその周辺の島々ではイモガイやゴホウラを集積した遺跡も多数みつかっています。

また、九州では古墳時代中・後期（5～6世紀）の遺跡からも、幅広いゴホウラ製貝輪 **図5** が集中的に出土します。宮崎県の地下式横穴墓や有明海沿岸の古墳に副葬された貝輪から、九州の人々が再び琉球諸島との交流を深めたことがうかがわれます。



図5：ゴホウラ貝輪
〔宮崎県大坪1号地下式横穴墓〕*

コラム 3

貝輪形の銅製品・石製品

弥生時代中期後半から古墳時代前期には、南海産の貝輪を模倣した青銅製腕輪（銅釧） **図6** が製作され、古墳時代前期には碧玉製の腕輪形製品（^{へきすい} 鍬形石・車輪石・石釧など）が多数造られました **図7**。

このような製品からは日本列島の人々の南海産の貝殻に対する強い憧れ（^{あこが}）がうかがえます。

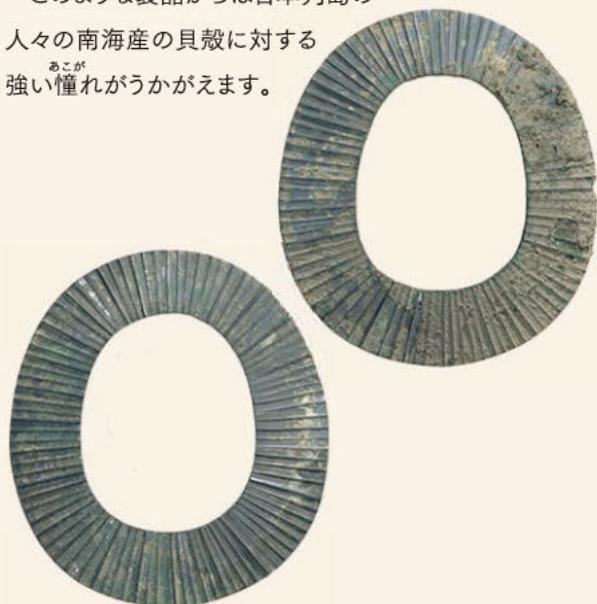


図6：車輪石形銅製品〔岡山県田邑丸山古墳〕***



図7：鍬形石・車輪石（楕円形）・石釧（円形：右下）
〔奈良県東大寺山古墳〕***

3 古墳文化の変容と 外縁地域との交流

古墳時代は、前方後円墳を築く文化が近畿地方を中心とした本州で生み出され、緩やかながらも日本列島に拡がり、一つの輪郭をみせはじめた時代です。しかし、前方後円墳の分布には、近畿・関東地方に約60%が集中するなど、地方ごとに著しい偏りがあり、文化の受け入れ方には各地でかなりの多様性があったようです。

九州の古墳にも、近畿地方で製作されたとみられる甲冑などの手工業製品が副葬されており、近畿地方などと活発な交流があったことがわかります。興味深いのは、その一方で貝輪にみられるように古墳文化圏以外の人々との交流が活発に行われていることです。

また、九州では4世紀末頃に北部でいち早く横穴式石室が出現し、東部・南部では5世紀中頃までに横穴墓や地下式横穴墓などの新しい形

態の古墳が成立しています。これらの横穴式の埋葬施設を用いる文化は、次第に九州以外の地方へも伝わり、その影響で各地で多様な古墳が生み出されました。

このように、九州では多様な横穴式の埋葬施設、地元の石材を利用した石人・石馬などの石造彫刻、琉球諸島から入手した貝殻で製作した貝輪など、独自の古墳文化が発達しました。本州・四国からやや離れた位置にあって、弥生時代から琉球諸島との交流が盛んであった九州ならではの古墳文化といえることができます。



図8：変形四獣鏡(熊本県塚坊主古墳)**



図9：盾庇付冑・短甲(左：六野原8号地下式横穴墓・右：宮崎県伝六野原古墳群)*



コラム 4

浮彫石材と京都

装飾古墳は、横穴式石室の壁面や石棺などに、彩色や浮き彫り・線刻でさまざまな文様などの装飾を施した古墳です。熊本県広浦古墳の装飾は、箱式石棺とされる石材に表現された、大刀や刀子などの浮彫です(図10)。この3点は、京都帝国大学考古学研究室の調査・報告によって広く世に知られるようになった資料です。長く熊本県と京都大学に分かれて保存されてきましたが、今回、ゆかりの京都の地では初めて「再会」することになりました。

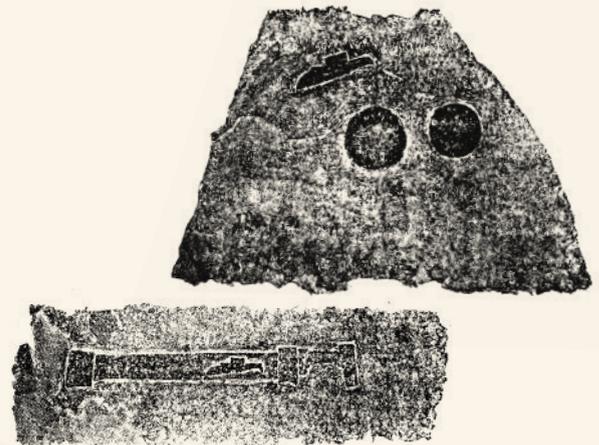


図10：浮彫拓本
〔熊本県広浦古墳〕(浜田他1919)

引用文献

- ・小田富士雄1974「石人石馬の系譜」『古代史発掘』7(古墳時代2 埴輪と石の造形)村井崑雄編、講談社
- ・中原斉・角田徳幸1994「山陰の石人・石馬—鳥取県・石馬谷古墳の石製品—」『島根考古学会誌』第11集
- ・浜田耕作・梅原末治1919「九州に於ける装飾ある古墳」(京都帝国大学文学部考古学研究室調査報告第3冊)
- ・柳沢一男2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』(シリーズ「遺跡を学ぶ」094)新泉社
- ・矢野一貞1861[文久1]『筑後将士軍談(筑後国史)』

※写真の*は、以下と対応しています。

*…宮崎県立西都原考古博物館蔵 **…熊本県立装飾古墳館蔵 ***…東京国立博物館蔵(参考資料、2022年度の特別公開では展示されません)

